

文部科学省 共同利用・共同研究拠点事業  
社会調査・データアーカイブ共同利用・共同研究拠点

2016 年度課題公募型二次分析研究会  
青少年の性行動・性意識の変化に関する計量的研究  
研究成果報告書

東京大学社会科学研究所  
附属社会調査・データアーカイブ研究センター  
2018 年（平成 30 年）1 月



2016 年度課題公募型二次分析研究会  
青少年の性行動・性意識の変化に関する計量的研究  
研究成果報告書

目次

はじめに.....	1
	林 雄亮
研究会の概要.....	2
成果報告プログラム.....	3
純潔規範が性行動に及ぼした影響の変容 —純潔規範の1980年代後半から「あそび志向」の90年代へ—.....	4
	片瀬 一男
青少年と性被害、その趨勢分析.....	22
	石川 由香里

## はじめに

林雄亮（武蔵大学）

本報告書は、東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センターが実施した2016年度二次分析研究会課題公募型研究「青少年の性行動・性意識の変化に関する計量的研究」の成果をまとめたものである。

本研究会では、青少年の性行動全国調査研究会および財団法人日本性教育協会により実施された「青少年の性行動全国調査」のうち、第2回～第7回調査のデータ（SSJDA版）を利用した。この調査は、1974年より約6年おきに実施されている継続的な大規模社会調査であると同時に、青少年の性行動の実態にアプローチすることのできるきわめて貴重な調査である。

本研究会は上記調査データの時系列的な実証分析によって、およそ40年間にわたる青少年層の性行動や意識の変化とその要因について明らかにすることを目的としている。これまでも「青少年の性行動全国調査」については、すでにさまざまな方面での研究蓄積がある。しかしながら、これまでの研究においては毎回の調査結果に重点が置かれてきており、青少年の性に関する意識や行動の変化とその要因について深く考察しようという視点が不足している。したがって本研究会では、およそ40年間に及ぶ調査期間に含まれるそれぞれの世代の特徴や、それを取り巻く環境の変化が、いかに青少年の性行動と意識を変えてきたのかについて考察してきた。

本研究会には8名の研究者が参加し、複数回にわたる研究会での報告とディスカッション、最終報告会での議論をおこなった。いずれの参加者においても研究は途中の段階であり、残された課題も少なくない。2017年度も継続して研究会が進められる予定であり、本報告書ではここまでの検討経緯についてまとめた2編の論文について、報告させていただく次第である。事務局として研究会を支えていただいた社会調査・データアーカイブ研究センターのスタッフの皆様に、心より御礼を申し上げる。

## 研究会の概要

### <テーマ>

青少年の性行動・性意識の変化に関する計量的研究

### <使用データ>

「第2回青少年の性行動全国調査（JASE SSJDA版），1981」(青少年の性行動全国調査研究会)

「第3回青少年の性行動全国調査（JASE SSJDA版），1987」(青少年の性行動全国調査研究会)

「第4回青少年の性行動全国調査（JASE SSJDA版），1993」(青少年の性行動全国調査研究会)

「第5回青少年の性行動全国調査（JASE SSJDA版），1999」(青少年の性行動全国調査研究会)

「第6回青少年の性行動全国調査（JASE SSJDA版），2005」(青少年の性行動全国調査研究会)

「第7回青少年の性行動全国調査（JASE SSJDA版），2011」(青少年の性行動全国調査研究会)

### <研究の概要>

本研究会では、「青少年の性行動全国調査」の時系列的な実証分析によって、およそ40年間にわたる青少年層の性行動や意識の変化とその要因について明らかにすることを目的とする。「青少年の性行動全国調査」は1974年からほぼ6年間隔で続けられ、これまで7回（1974、1981、1987、1993、1999、2005、2011年）の調査がおこなわれてきた。日本の青少年の性行動や性意識の変化を全国規模で時系列的に把握することが可能であるため、近年では国際的にもその意義が認知されてきている。また一連の調査は、その継続性と代表性という点において、きわめて貴重な調査研究であり、日本の青少年の性行動や性意識、性教育の実態を知るうえで必要不可欠なものとなっている。本研究会では、およそ40年間に及ぶ調査期間に含まれるそれぞれの世代の特徴や、それを取り巻く環境の変化が、いかに青少年の性行動と意識を変えてきたのかについて考察していく。なお、研究の成果は2017年度末に一般図書として刊行する予定である。

成果報告会 3/13 〇名参加

### ○2016年度

第1回研究会 06/12 7名参加

第2回研究会 08/06 7名参加

第3回研究会 10/22 7名参加

第4回研究会 12/11 7名参加

第5回研究会 02/19 7名参加

成果報告会 03/13 7名参加



東京大学社会科学研究所 附属社会調査・データアーカイブ研究センター 社会調査・データアーカイブ共同利用・共同研究拠点事業

## 二次分析研究会2016 課題公募型研究 成果報告会

### 青少年の性行動・性意識の変化に関する計量的研究

#### ■ 日時／場所:

2017年3月13日(月) 13:00～16:50

東京大学(本郷キャンパス) 赤門総合研究棟5階 526 センター作業室

#### ■ プログラム:

##### 第1部 13:00～14:15

司会: 石川由香里(活水女子大学)

- ・『『青少年の性行動全国調査』にみる若者の性行動・性意識の変化』林雄亮(武蔵大学)
- ・「純潔規範が性行動に及ぼした影響の変容」片瀬一男(東北学院大学)
- ・「青少年をとりまく環境と性行動の関連」苔米地なつ帆(東京大学)

##### 第2部 14:25～15:40

司会: 苔米地なつ帆(東京大学)

- ・「青少年の家庭環境・教育と初交経験」林雄亮(武蔵大学)
- ・「青少年と性被害、その趨勢分析」石川由香里(活水女子大学)
- ・「青少年の避妊の実行の規定要因と時代変化」俣野美咲(武蔵大学大学院)

##### 第3部 15:50～16:50

司会: 林雄亮(武蔵大学)

- ・「恋人がいない青少年にみる性をめぐる意識と態度の変化」土田陽子(和歌山大学)
- ・「青少年における性イメージとその規定因の変化について」針原素子(東京大学)

■ 事前の申し込みは不要です。直接、会場にお越しください。

■ お問い合わせは、s-analysis@iss.u-tokyo.ac.jp まで





# 純潔規範が性行動に及ぼした影響の変容 —純潔規範の1980年代後半から「あそび志向」の90年代へ—

片瀬一男（東北学院大学）

## はじめに

本稿では、1980年代後半から1990年代初頭における純潔規範の解体が、青少年の性行動を抑止する効果を失い、やがて1990年代後半における性行動の急激な上昇の素地を作った、という仮説のもとに分析を行う。具体的には、1987年と93年の日本性教育協会「青少年の性行動全国調査」（以下JASE調査）データをもとに、一部、NHK放送文化研究所の「日本人の意識」調査データで補填しながら純潔規範が高校生のキス経験におよぼす影響が、この時期の間にもどのように変容したか検討する。

この時期がとりわけ注目に値するのは、1980年代後半まで停滞していた高校生の性行動経験率がこの時期を境に上昇に転じ、やがて90年代の若者文化における情報化の進展、とりわけ携帯電話（やがてスマートフォン）の普及によって、急激な増加を示す助走期にあたるからである（図1参照）。

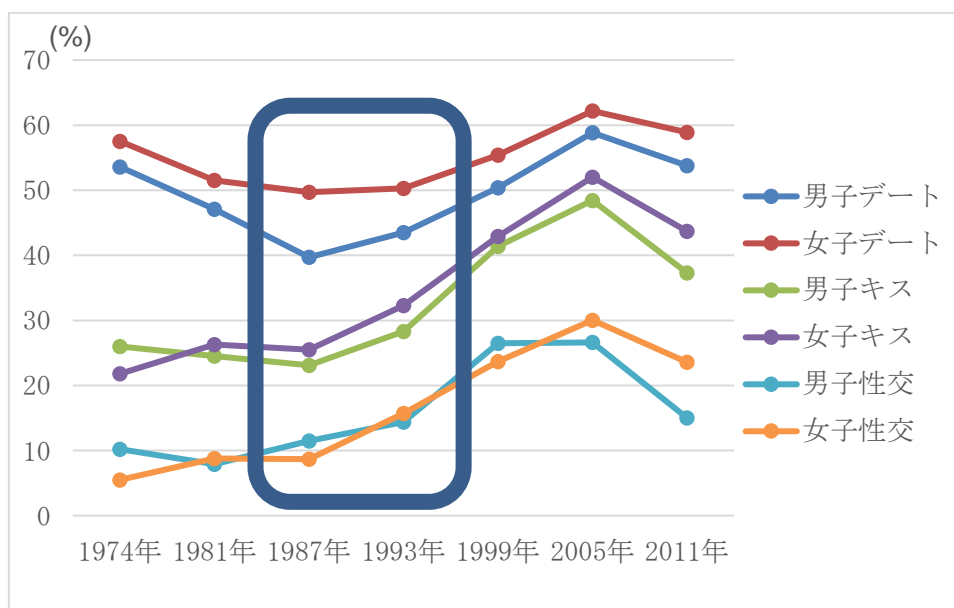


図1 高校生の性行動の推移（出典：日本性教育協会，2012）

図1に示したように、高校生の性行動（デート・キス・性交）の場合、74年から87年まではどの性行動の経験率も停滞していたが、80年代後半から90年代にかけて増加傾向に転じている。

この時期はまた高校進学率が急速に上昇していった時代でもあった。1948年の新制高校の発足当時、20%程度だった高校進学率は1950年には42.5%となり、いわゆる「団塊の世代」が高校進学期を迎えた1968年には高校の増設により70.7%まで拡大した。そして、1974年には90%を超え、それ以降は横ばい状態を続けている。したがって、1980年代後半には<高卒当然社会>ともいふべき社会が成立したとみることができる。その背景には、1960年代前半にピークを迎えた「高校全入運動」があり、地域差を伴いながらも高校教育機会の提供構造が定着したことがあった（香川・児玉・相澤2014）。

こうした高校進学率の上昇に伴い、青少年の性のあり方を問題視する論調もこの時



期から増えた。実際この時期、全年齢層では人工妊娠中絶数は減少していたが、20歳未満の人工妊娠中絶率は1975年までは全中絶数の1.5%程度だったが、85年には5.1%、95年には7.6%を占めるに至った（佐藤 1997）。また、国会でもこの10代の人工妊娠中絶の問題が取り上げられた<sup>1</sup>。

そこで以下では、高校生における性行動の転換点ともいえる1980年代後半から90年代前半における青少年の性規範を取り上げる。なかでも純潔規範とでも呼ぶべき性規範（婚前性交を禁止する規範）に関する質問は、7回にわたるJASE調査のうちでも、1987年（第3回）調査と1993年（第4回調査）にしかない。そこで、同様の質問をしているNHK放送文化研究所の「日本人の意識」調査でその前後を補いながら、婚前性交に対する態度の時代的变化を明らかにする。その後、再びこのJASE調査2回のデータを合併し、調査年も変数に入れて男女別にログリニア分析を行い、純潔規範（S）とキス経験（K）の関係が、この2回の調査（Y）の間にもどのように変容したのか男女別に検討する。さらに、変化が生じた関係についてクロス表分析（標準残差の分析）で変化の様相を個別に検討し、最後にキス経験を規定する要因としての純潔規範の効果が調査年によって変化しているかについて、規範と調査年の交互作用項を入れたロジスティック回帰分析で確認する。

## 1. 若者の性の戦史：1940年代から2000年代へ

実際の分析に入る前に、そもそも「純潔」とは何か、またそれがなぜ近代社会（ただし戦後に限る<sup>2</sup>）で要請されたのかについて簡単にみておこう。戦前期の村落共同体において性風俗が開放的であったとの指摘は民俗学においてなされている（赤松 1991）し、また敗戦直後の都市部でも皇居前広場や大阪城公園が若者の「愛の空間」（屋外性交の場）であったとの証言も紹介されている（井上 1999:10-17）が、こうした性の放逸から生じる問題に対処すべく、戦後の文部省は「純潔教育」の名のもとに性教育の必要性を主張しはじめる。具体的には1947（昭和22）年に文部省発社1号「純潔教育の実施について」を出したが、その背景には2つの問題があったという（小山 2014:16-20）。

1つは直接の契機として当時、「パンパン」と呼ばれた「私娼問題」があり、前年度の次官会議で「私娼問題並びに発生の防止及び保護対策」<sup>3</sup>が決定されたことがあった。この背景には「パンパン」すなわち「闇の女」たちが占領軍兵士を相手におこなった私娼行為があり、それを取りしめる一種の「社会教育」として「純潔教育」が要請された。そのため、同年純潔教育委員会が文部省に設けられ、1949（昭和24）年に「純潔教育基本要項」が発表されるとともに、『純潔教育基要項：附・性教育のあり

<sup>1</sup>たとえば、1988年4月の参議院国民生活に関する調査会では自民党の寺内弘子議員が、性非行で補導された女子の数や10代の人口妊娠中絶の増加を問題にし、ピルの解禁によって性風俗の乱れに拍車がかかるとして警察庁や厚生省の見解を質している。また1991年4月の参議員文教委員会では、産婦人科医でもある針生雄吉議員（公明党）が、やはり10代の人口妊娠中絶の増加に関して、性教育の徹底や保健所での相談活動を通じ、避妊の方法（低用量ピルやIUDも含む）について初等教育の段階から教えるべきだと主張している。なお、1992（平成4）年の学習指導要領の改訂により、小学校5年の保健と理科に「性」に関する事項が入れられ、「性教育元年」といった報道がされていたという（高橋 1993:31）。

<sup>2</sup>本稿では論じられないが、明治・大正期の恋愛観や性規範については文学作品（言説）の分析だが、佐伯（1997）や小谷野（1997）による論考がある。また最近ではD.ノッター（2017）が、日米比較という比較歴史社会的アプローチから、明治・大正期の書籍・雑誌の言説を分析し、「ロマンティック・ラブ」や「純潔」をキーワードに恋愛結婚や近代家族の成立について、日米比較を踏まえて論じている。また、戦前の性教育については、高橋（1993）などを参照のこと。高橋（1993）によると、最初の性教育論としては、1888（明治21）年に「性教論一斑」が刊行され、実際に学生を対象に行われた教育としては、医学者の富士川游の講演「色情教育講演会」が最初であるという。

<sup>3</sup>その内容は「公娼廃止後の風俗対策」と「闇の女」発生防止及び保護対策」という2つの柱となっていたという（小山 2014）。

方』という冊子も刊行された。

2つ目はGHQの要請によって学校基本法第5条に入れられた男女共学の原則であり、『純潔教育基要項：附・性教育のあり方』の冒頭も「男女の交際及び共学」にあてられた。そこでは男女の相互理解と礼儀・規律の必要性が強調された。この時点で純潔教育は私娼対策を目的とした社会教育から、男女共学化のもとでの男女交際のための学校教育へとあり方を変えた（小山 2014:16-20）。そもそも「純潔」とは、1950年代60年代の純潔教育の流れを整理した池谷（2001:17）によれば、「結婚までは性交を控え、結婚後は夫婦間以外に性交渉しないこと」を意味している。したがって、この時期の性教育の目的は、純潔すなわち青少年を性から遠ざけておくことにあったとみることができる。

時代はくだるが、NHK放送文化研究所が1973年から行っている「日本人の意識」調査に、性規範について尋ねる項目がある。選択肢は図2-1・2-2に示した4つで、最初の2つ（「結婚式がすむまでは、性的まじわりをすべきでない」「結婚が前提ならかまわない」）が純潔規範にあたる。これに対して、のちに論じるが、3番目の選択肢（「愛しあっていればかまわない」）は「純愛志向」、4番目の選択肢（「結婚とか愛とかは関係ない」）は「あそび志向」と呼ぶことができる。この「日本人の意識」調査のなから高校生を取り出し、「婚前交渉に対する態度」の変化を示したものが図2-1（男子）、図2-2（女子）である。

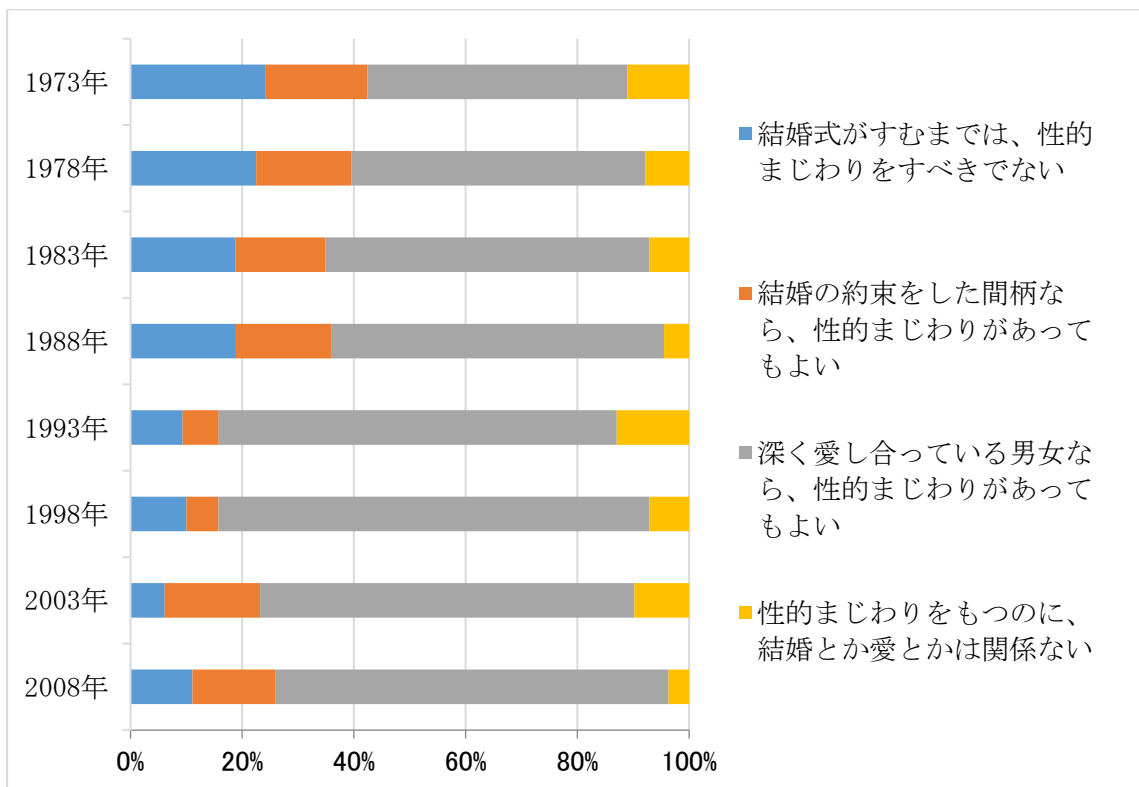


図2-1 男子高校生の婚前性交に対する態度（出典：「日本人の意識」調査）

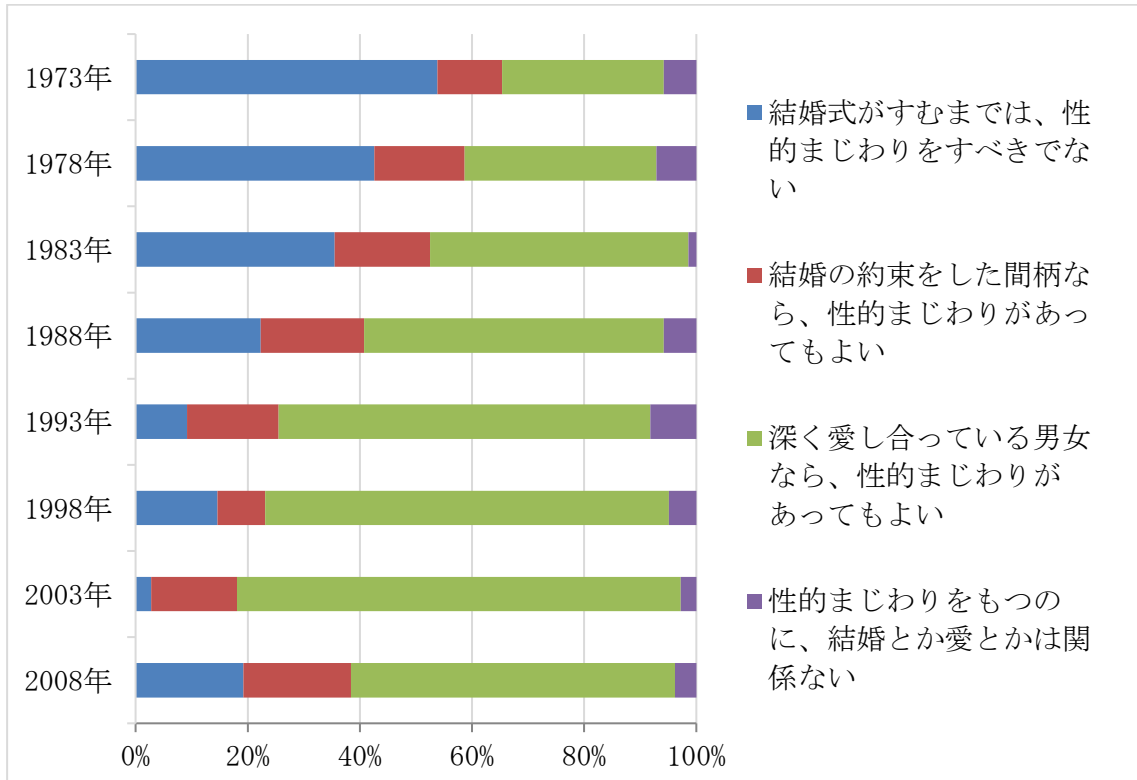


図2-2 女子高校生の婚前性交に対する態度（出典：「日本人の意識」調査）

「婚前交渉に対する態度」は、「日本人の意識」調査のなかでも、40年間で最も変化の大きかった項目といわれるが（高橋・荒牧 2014）<sup>4</sup>、高校生の年代で見ても変化は大きい。男子の場合、婚前交渉に慎重な者（結婚または結婚の約束を前提とする者）は、1973年より減り続け、とくにJASE調査で婚前性交への可否を尋ねていた80年代後半から90年代前半には、大幅に減少していた。女子についても同じである。女子では、1973年の時点で純潔規範をもつ者は約7割おり、男子の4割弱に比べて多かったのも、その後の純潔規範の減少の度合いは大きい。そして、今回の分析の中心となる1980年代後半から90年代前半になると、婚前性交に対する態度の分布は、男女間の差異が小さくなる。のちのJASE調査の分析でも確認するが、このことは女子にのみ純潔を求める「性の二重基準」が解体していったことを意味する。

さらに、先にも触れたように、この時期は1990年代における高校生の性行動経験率の急上昇期の準備期間ともいえるべき時期であった。すなわち、この時期はまず婚前性交を否定する規範意識が男女とも低下していたが、やがて90年代に入って携帯電話など若者が自由に利用できるツールが普及することで、家族の社会統制を離れたコミュニケーションが活性化され、性行動も活発化していった（片瀬 2007）。しかし、再び図2に戻ると、男女とも2000年代に入ってこの変化は逆転し、男女とも婚前交渉に慎重な者が増えはじめた。そして、そのことが図1でみた性交経験をはじめとする性行動経験率の低下につながっていると考えられる。

こうしてみると、1970年代以降における青少年の性行動の時代区分については、以下の4つの区分を想定することができる。

<sup>4</sup> 高橋・荒牧（2014）によれば、NHK「日本人の意識」調査の全項目の中で、1973年～2013年の40年間で最も減少の大きかった項目は、「婚前交渉」に「否」（選択肢で言えば「結婚式がすむまでは、性的まじわりをすべきでない」という回答で、この間、全年代層で集計して37ポイントほど減っている。これらの変化はまた、時代効果や加齢効果によるというより、コーホート効果すなわち世代交代の効果によるという。婚前交渉に否定的な古い世代が退出し、新たに婚前交渉を否定しない世代が登場することによって、全体としての回答の分布における変動が生じたことになる。

### ①純潔規範の時代（1970年代から70年代後半）

純潔規範が減少しつつあったとはいえ、女子では6割程度が婚前性交に否定的であった時代。

### ②移行期の時代（1980年代前半から90年代前半）

男女とも純潔規範が解体し、純愛志向によって変わった時期。その傾向は特に女子で大きく、規範をめぐるジェンダー・ギャップ、すなわち女子にのみ純潔を求める「性の二重基準」が解体していった時期。

### ③純粋恋愛／「遊び志向」の時代（1990年代から2000年代）

純愛志向が高校生の主要な規範となる一方で、一部にはモノガミーを否定した「あそび志向」の性意識も現れる。また、携帯電話をはじめとするパーソナルなコミュニケーションツールの出現により、親の社会統制を離れた性行動が活発化した時期。

### ④伝統回帰／「草食化」の時代（2005年代以降）

NHK放送文化研究所の「日本人の意識」調査でも婚前性交を否定する意見が男女とも増え始め、JASE調査でも高校生の性行動率が低下に転じた時期。しばしば「草食化（系）男子」（深澤 2007；森岡 2008）現象と呼ばれてきたが、JASE調査データの分析によれば、性行動の不活発化は男子のみならず女子で進行している側面もみられ、現代青年にとって性行動がルーマンの言う意味での「リスク」ないしは「危険」となっていることが示唆されている<sup>5</sup>。

このうち以下で扱うのは、②の局面、すなわち1981年代後半から90年代初頭にかけて、純愛規範から純愛志向へとまず規範レベルの変化が生じ、やがて1990年代の「性

<sup>5</sup> こうした21世紀における性行動の不活発化について、森岡（2008）は現代の男性が、従来の男性性の呪縛に拘束されず、対等な男女観をもつために、女性との関係を性的欲望で壊すことを忌避するという説明をしているのに対して、高橋（2013）はルーマン（Luhmann 1984=1993）のリスク概念を援用して説明をする。それによると、現代の若者は、自己の選択がもたらすポジティブな結果ではなく、それが生じうる可能性のあるネガティブな結果＝リスクについて、より敏感になりつつある、という。しかし、高橋（2013）が「リスク化説」の論証に用いたリスクの指標は現在に定位した性イメージであり、本来、時間次元を伴ったルーマン（Luhmann 1991=2014）のリスク概念すなわち自己選択に伴う「未来の損害可能性」（小松 2003:98）としてのリスクを十分にとらえていないと考えられた。ルーマン（Luhmann 1991=2014）のいう「リスク」概念の背後には、「未来」の出来事として想起しているものもすべて、予期しているその「現在」においてしか現れないという「非同時的なものの同時性」という事態が想定されているからである。また、それに伴って「リスク」と「危険」、「決定者」と「被影響者」というルーマン（Luhmann 1991=2014）のリスク論における重要な区別も高橋（2013）の議論では等閑視されていた。

そこで片瀬（2017）では、「未来の損害可能性」としての妊娠懸念と性感染症懸念に着目し、2011年に行われた第7回JASE調査のデータをもとに、大学生男女の性交経験について分析を行った。その結果、性感染症懸念は、これが高いほどとりわけ女子において性交が抑制されるという点で、「リスク」とみなすことができたが、妊娠懸念についてはこれが高いほど性交経験率も高くなること、また性別との間に有意な交互作用がみられ、女子ほど妊娠懸念が高いほど性交経験率も高くなっていた。そこで、性交経験者のみをとりあげ、妊娠懸念が性行動に及ぼす影響をみるところ、女子においてのみ、妊娠懸念が高いほど、早期の性行動が行われず、初交年齢が高くなっていたうえに、性交相手の数も少なくなっていた。また性規範の面でも、男子では、妊娠懸念が性規範に関わらないが、女子の場合、妊娠懸念が性規範に関連し、妊娠懸念が高い群ほど、「愛情のない性交」や「知り合ってからすぐの者との性交」といった奔放な性規範を否定する傾向があった。妊娠懸念は女子の性交経験率を一見すると高めるものの、経験者においては、慎重で抑制的な性行動をもたらしている、とみることができる。

このことから、性交経験と妊娠懸念の関係も、当初の仮説とは因果関係が逆であることが示唆された。すなわち、女子では妊娠懸念が高いために性交経験が増えるのではなく、性交未経験者に比べて経験者は、性交経験があるだけに妊娠する懸念を抱きやすいと推測された。つまり、実際に性交を経験しているために、妊娠の懸念を抱きやすいのであって、妊娠への懸念が強いために性交をするわけではないと考えられるのである。この点で、妊娠懸念は性交経験の不活発化をもたらす「リスク」ということができない。むしろ、ルーマン（Luhmann 1991=2014）が「危険」と呼ぶものに近い。ルーマン（Luhmann 1991=2014:38）によれば、ある出来事とその決定や選択を行う「決定者」には自己に帰属される「リスク」であるのに対して、その決定に関与もしくは影響しえない「被影響者」にとっては外部に帰属される「危険」として立ち現れるという。避妊に関していえば、青少年の避妊の方法は、ほとんどがコンドームであり、避妊の決定権は主として男子に握られている。その結果、女子はその決定を甘受する「被影響者」である可能性が高い。

愛バブル」とでもいうべき時期への助走期に当たる時期である。

## 2. 純潔主義から純愛志向へ：1980年代から90年代前半

### 2.1 純潔規範の解体

先にも述べたように、1980年代から青少年の純潔規範が解体を始めている。JASE調査では、1987年と93年の2回にわたって、図3に示した選択肢で婚前性交に対する態度を聞いている。この4つの選択肢のうち「どんな場合でもいけない」「結婚が前提ならかまわない」「愛しあっていればかまわない」「お互いに納得していればかまわない」という回答が純潔主義に当たるとみてよいだろう。

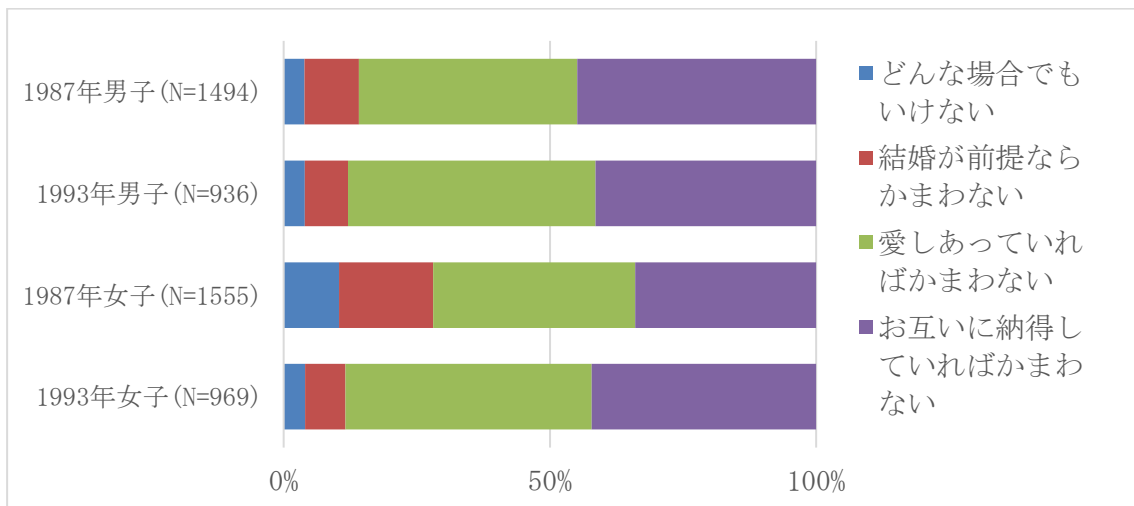


図3 高校生の性規範の変化：1987-93年（JASE調査）

図3はこの問いに対する回答を調査年次別・男女別に示したものである。男女とも調査年次との関係は有意であり（男子： $\chi^2=8.064$   $df=3$ ,  $p<0.05$ , 女子： $\chi^2=94.278$   $df=3$ ,  $p<0.001$ ）、この間に男女とも回答に変化があったと言える。そこで、年次による変化の大きさを見るために、直線的な変化を表すとされる（轟 2001）ソマーズのdxyを計算すると、男子ではdxy=-0.019であるのに対して、女子ではdxy=0.168となり、女子の変化が大きいことがわかる。女子で「結婚が前提ならかまわない」「お互いが納得していればかまわない」が10ポイント、「愛しあっていればかまわない」「お互いに納得していればかまわない」がいずれも8ポイント増えている一方で、「どんな場合でもいけない」が6ポイント減少している。その結果、回答の分布は男女間でほとんど変わらなくなった。このことは、先にも述べたように「性の二重規準」の解体を示すものとみてよいだろう。

またこの2つの調査に共通するもう1つの特徴は、石川（2007）のいう＜純粋な恋愛＞志向であろう。＜純粋な恋愛＞とは、（1）恋愛に高い価値を見出し、（2）愛があれば性関係を結ぶのは当然と考えるが、（3）一度の恋愛相手はただ一人に限る（モノガミー規範）、（4）その相手の社会的属性は問わない、という理念である（石川 2007:82）<sup>6</sup>。この＜純粋な恋愛志向＞とは、NHK放送文化研究所の「日本人の意識」調査の選択肢で言えば「深く愛し合っている男女なら、性的まじわりがあってもよい」、JASE調査では「愛しあっていればかまわない」にあたる。これは個別的な愛情によって婚前性交を正当化する論理である。JASE調査ではあまり明確にみられないが、「日本人の意識」調査では1980年代後半から90年代後半にかけて婚前性交に慎

<sup>6</sup>ただし、＜純粋な恋愛＞志向は、あくまでジェンダー秩序の再生産を伴う点で、A. ギデンス（Giddens 1993=1995）のいう「純粋な関係性」すなわち自立した個人（男女）平等な関係性とは異なる、とされる（石川 2007:83）。

重な意識をもつ者が減少することで、増えていったのは結婚だけでなく愛情との結びつきを否定する意識（「性的まじわりをもつのに、結婚とか愛とかは関係ない」）ではなく、むしろ「強い恋愛」（草柳 1999）<sup>7</sup>すなわち全人格的コミットメント、たとえば唯一無二の他者の希求を恋愛に求める志向性（「深く愛し合っている男女なら、性的まじわりがあってもよい」）あるいは＜純粋な恋愛志向＞であった。

それはともかく、A.ギデنز（Giddens 1992=1995）によれば、20世紀は性別役割意識の解体に伴い、恋愛・結婚・性愛の三位一体からなる「ロマンティック・ラヴ」から「コンフルエント・ラヴ」へという「感情革命」が生じた世紀であり、「性の二重規範」の解体をもたらすことで、とりわけ女性に結婚を前提としない婚前性交を可能にした。実際、先にみた「日本人の意識」調査の項目で減少が著しかった項目は、いずれも結婚に言及するもの（結婚または結婚の約束を前提とする性交を可とするもの）であった。したがって、1980年代後半から90年代初頭は、恋愛と結婚の分離が若者において起こっていた。さらにこの時期、避妊技術の普及（コンドームの自動販売機での販売など）など、性的にも男女平等を可能にする技術的条件が整った結果、セクシュアリティと生殖が明確に分離され、生殖をとまわらない性、親密圏における快樂のみを目的とした性行為—「自由に塑形できるセクシュアリティ」—が制度的に認められたことになる。

さらに、1973年と78年のNHK放送文化研究所の「日本人の意識」調査における婚前性交に対する態度を分析した見田（1975,1980）によれば、性意識は宗教意識と天皇感情とともに、世代差が最も明瞭で、この時期、多数派が逆転している項目であるという。すなわち1973年の時点で婚前性交を肯定する者は、20代前半の男性では8割、女性では6割と年長世代に比べて突出して多い。さらに1978年になると、婚前交渉を否定する者はさらに減少し、とりわけ愛情で可という者が男女とも増えている。また見合い結婚と恋愛結婚の比率は、すでに1960年代半ばに逆転していたから（国立社会保障・人口問題研究所 2016）、恋愛・結婚・性愛の三位一体を特徴とする「ロマンティック・ラヴ」は、1970年代前半には成立していたとみることができる。

## 2.2男子における性規範と性行動

次に、こうした純潔規範の解体が、実際の性行動とどのように関連しているか、またその関連には年次による変化があったか、男女別にログリニア分析で見ていこう。ここで取り上げる項目は、K：キス経験、S：純潔規範（結婚・結婚の約束vs.愛情・納得）、Y：調査年（1987,93年）であり、それぞれの項が関連しあっていることを示す均一連関モデルからはじめて、いずれかの項目が独立していると仮定する条件付き独立モデル、3つの項が独立しているとする独立モデルの順に検討する。

まず男子については、ログリニア分析の結果（表1）、有意水準を5%とすると、均一連関モデルと条件付き独立モデルのNo. 4が棄却されていない。このうち、カイ二乗値と自由度から計算されるAICを基準にすると、AICが13.796と最も小さい〔SY〕〔SK〕からなる条件付独立モデルのNo. 2が採択されることになる。これは、調査年と性規範、性規範とキス経験の間に関連を仮定し、調査年とキス経験の間には関連を認めないというモデルである。

また、ログリニア分析の場合、モデルを当てはめた場合の残差の分析が有用であると推奨されている（太郎丸 2005:143）。というのも残差はモデルから予想される期待値と実際に観測された観測値との乖離が、どのセルで起こっているかを示すからである。残差には標準残差と調整残差がよく使われるが、ここでは調整残差を用いること

<sup>7</sup>草柳（1999）はG. ジンメル『社会分化論』をもとに、若者の「強い恋愛」から「穏やかな恋愛へ」の転換を指摘する。ここでいう「強い恋愛」とは、ジェンダー秩序を前提に唯一無二の他者としての異性をもとめるものであるのに対して、社会の機能分化が進むなかで、「穏やかな恋愛」における部分的な関係、たとえばネットワークの「交差点」としての他者を指定するような関係が求められるようになった、という。

にする。

表1 男子高校生のキス経験に関するログリニア分析

No.	モデル	モデル適合			
		$G^2$	df	p	AIC
1	均一連関モデル [YS] [SK] [KY]	1.963	1	0.375	-0.037
2	条件付独立モデル [YS] [SK]	6.385	2	0.041	2.385
3	[YS] [KY]	15.044	2	0.001	11.044
4	[SK] [KY]	1.963	2	0.375	-2.037
5	一変数独立モデル [YS] [K]	21.436	3	0	15.436
6	[SK] [Y]	8.355	3	0.039	2.355
7	[KY] [S]	17.014	3	0.001	11.014
8	独立モデル [S] [K] [Y]	23.406	4	0	15.406

注) K:キス経験 S:性規範 (2カテゴリー) Y:調査年 (1987,93年)

表2には、調査年次ごとに性規範とキス経験の関連をクロス集計でみたあと、カイ二乗検定を行うとともに、セルごとに調整残差を計算した結果を示している。

まずカイ二乗検定の結果を見ると、1987年には性規範とキス経験の関連が有意であり、「愛しあっていればかまわない」「納得しければかまわない」という規範をもつ者でキス経験が20%を超え、高くなっている。また調整残差をみると、「愛しあっていればかまわない」で3.0ともしっかり期待値を上回っているのに対して、「結婚が前提ならかまわない」で-2.9と期待値を下回っている。

表2 調査年次ごとにみた性規範とキス経験 (男子高校生, %表示)

調査年次	性規範	キス経験		合計
		ある	ない	
1987年	どんな場合でもいけない	17.2	82.8	100.0
		-1.4	1.4	
	結婚が前提ならかまわない	15.2	84.8	100.0
		<b>-2.9</b>	2.9	
	愛しあっていればかまわない	29.0	71.0	100.0
	<b>3.0</b>	-3.0		
	お互いに納得していればかまわない	24.1	75.9	100.0
		-0.6	0.6	
		$\chi^2 =$	14.84**	
1993年	どんな場合でもいけない	24.2	75.8	100.0
		-0.7	0.7	
	結婚が前提ならかまわない	21.6	78.4	100.0
		-1.6	1.6	
	愛しあっていればかまわない	33.1	66.9	100.0
	<b>2.1</b>	<b>-2.1</b>		
	お互いに納得していればかまわない	28.0	72.0	100.0
		-0.9	0.9	
		$\chi^2 =$	5.532n.s.	

注) \*\*\* : p<0.05 下段は調整残差 太字は±1.96以上

これに対して、1993年では性規範とキス経験の関連が有意になっておらず、どの性規範をもつ者でも87年に比べてキス経験率が上昇している。とくに87年にはキス経験を抑止していた純潔規範「どんな場合でもいけない」をもつ者で7ポイント、また「結婚が前提ならかまわない」という者で6.4ポイント上昇したため、それまでキス経験を

相対的に促進した規範をもつ者のキス経験率との差異が縮小したと考えられる。最後に、1993年の調整残差をみると、有意になったのは純愛志向の規範ともいえる「愛しあっていればかまわない」の2.2であり、この規範をもつ者のキス経験率は33.1%と、他に比べても、もっとも経験率が高くなっている。

この純愛規範がキス経験を促進していることを確認するために、最後に男子高校生のキス経験を規定する要因を、交互作用項も含む二項ロジスティック回帰分析によって検討する。従属変数はキス経験ダミー（あり=1、なし=0）、独立変数として調査年次ダミー（1987年=0、1993年=1）と性規範ダミーを3項に分けて入れた（基準カテゴリーは純潔規範とし、結婚ダミー、愛情ダミー、納得ダミーの3変数）。その結果は、表3に示した。

**表3 キス経験の二項ロジスティック回帰分析（男子高校生）**

	モデルⅠ			モデルⅡ		
	B		Exp(B)	B		Exp(B)
調査年ダミー	0.324	***	1.382	1.463	***	4.317
結婚ダミー	-0.148		0.862	0.344		1.411
愛情ダミー	0.575	**	1.776	1.163	***	3.199
納得ダミー	0.336	*	1.399	0.915	***	2.496
結婚ダミー×調査年ダミー				-1.034	*	0.356
愛情ダミー×調査年ダミー				-1.269	***	0.281
納得ダミー×調査年ダミー				-1.261	***	0.283
定数	-1.528	***	0.217	-2.061	***	0.127
-2 対数尤度	2858.957			2844.254		
Cox-Snell R2	0.015			0.021		
Nagelkerke R2	0.022			0.031		

注) \*:p<0.05 \*\* : p<0.01 \*\*\* : p<0.001

これによると、まずモデルⅠからみて、調査年の効果は有意で、1987年に比べ93年になるほどキス経験が多くなっている。また性規範のうち、「愛情で可」「納得で可」という者は、純潔規範「（婚前性交は）どんな場合でもいけない」をもつ者に比べキス経験が多い。さらにモデルⅡから性規範と調査年次の交互作用項の効果を見ると、いずれも有意な負の値を示している。ここでは1997年を基準として0とおき、性規範で婚前性交「不可」を基準カテゴリーとしているので、婚前性交を「結婚」「愛情」「納得」で許容する者は、1993年よりも87年においてキス経験が少なくなっている。逆に言えば、図4にも示したように、婚前性交に許容的な者は、純潔規範をもつ者に比べ、87年に比べて93年ほどキス経験が多くなっていることになる。



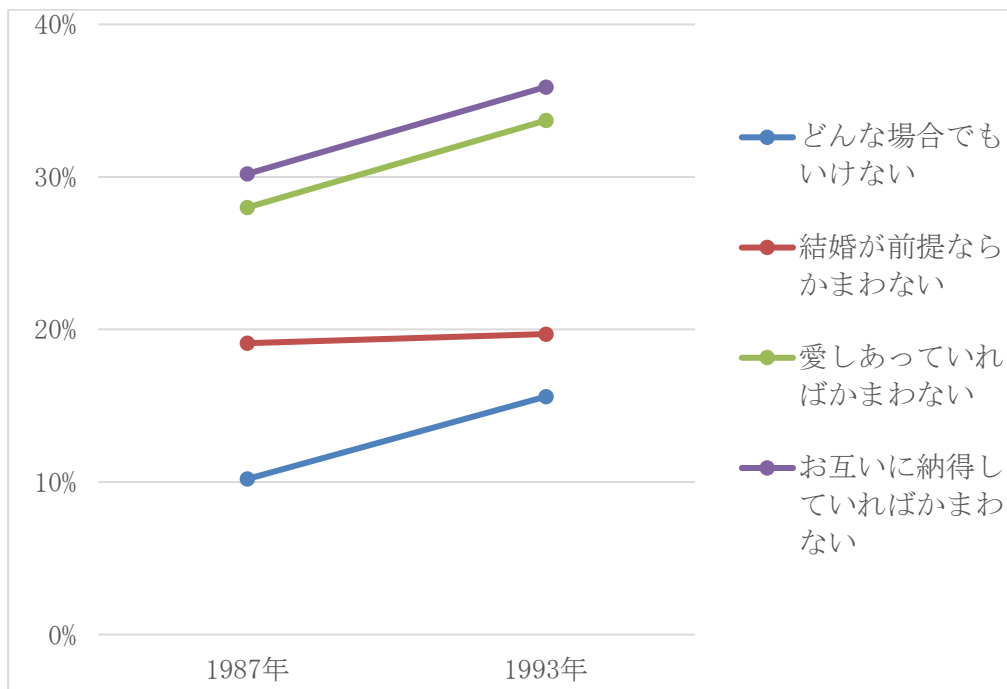


図4 性規範別にみたキス経験率（男子高校生）

### 2.3 女子における性規範と性行動

次に同じ項目を使って、女子高校生にログリニアモデルを当てはめ、その適合度をみた。その結果は表4に示した。女子の場合、p値の欄に示したように5%水準でみると採択されるモデルは、均一連関モデルのみである。

このモデルは、〔SY〕〔SK〕〔KY〕という項の組み合わせからなるので、調査年次と性規範とキス経験が関連していることを意味している。したがって、キス経験は図5に示したように、調査年次と性規範の双方の影響を受けているとみることができる。

表4 女子高校生のキス経験に関するログリニア分析

No.	モデル		モデル適合度			
			$G^2$	df	p	AIC
1	均一連関モデル	〔YS〕〔SK〕〔KY〕	0.127	1	0.721	-1.873
2	条件付独立モデル	〔YS〕〔KS〕	9.611	2	0.008	5.611
3		〔YS〕〔KY〕	39.743	2	0.000	35.743
4		〔KS〕〔KY〕	87.995	2	0.000	83.995
5	一変数独立モデル	〔YS〕〔K〕	58.432	3	0.000	52.432
6		〔SK〕〔Y〕	106.683	3	0.000	100.683
7		〔KY〕〔S〕	136.816	3	0.000	130.816
8	独立モデル	〔S〕〔K〕〔Y〕	155.504	4	0.000	147.504

注) K:キス経験 S:性規範 (2カテゴリー) Y:調査年 (1987,93年)

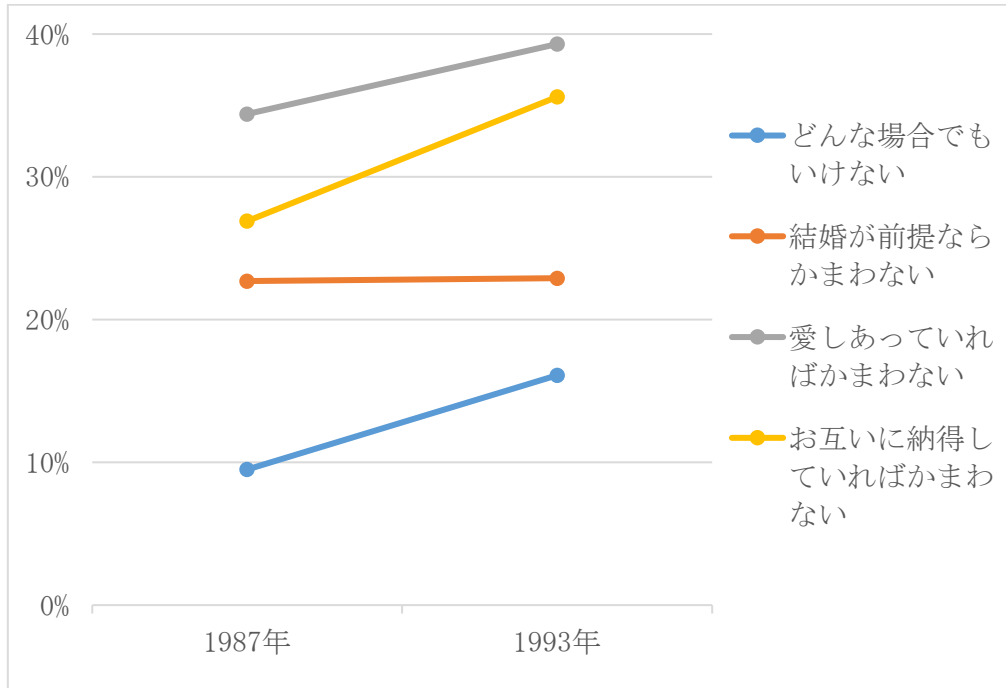


図5 性規範別にみたキス経験率（女子高校生）

さらに男子と同様、調査年次別に性規範とキス経験のクロス表を作成し、カイ二乗検定を行うとともに、調整残差を計算した結果を表5に示した。

表5 調査年次ごとにみた性規範とキス経験（女子高校生，%表示）

調査年次	性規範	キス経験		合計
		ある	ない	
1987年	どんな場合でもいけない	9.5	90.5	100.0
		-5.3	5.3	
	結婚が前提ならかまわない	22.7	77.3	100.0
		-1.8	1.8	
愛しあっていればかまわない	34.4	65.6	100.0	
	5.0	-5.0		
お互いに納得していればかまわない	26.9	73.1	100.0	
	-0.2	0.2		
		$\chi^2 =$	42.90***	
1993年	どんな場合でもいけない	16.1	83.9	100.0
		<b>-2.3</b>	<b>2.3</b>	
	結婚が前提ならかまわない	39.3	60.7	100.0
		-2.3	2.3	
愛しあっていればかまわない	33.1	66.9	100.0	
	2.1	-2.1		
お互いに納得していればかまわない	35.6	64.4	100.0	
	0.0	0.0		
		$\chi^2 =$	12.60**	

注) \*\*\* :  $p < 0.05$  下段は調整残差 太字は $\pm 1.96$ 以上

調整残差はどちらの年度も「互いに納得していればかまわない」のセルを除き、いずれも5%水準で有意となっており、性規範とキス経験がどちらの年度でも強く結びついていることがわかるが、1987年の「愛しあっていればかまわない」の調整残差が

5.0ととびぬけて高く、この時期、石川（2007）のいう〈純愛志向〉が女子のキス経験をとりわけ促進していたことがわかる。

最後に女子におけるキスの規定因を明らかにするために、男子と同じモデルでロジスティック回帰分析を行った（表6）。

**表6 キス経験の二項ロジスティック回帰分析（女子高校生）**

	モデルⅢ		モデルⅣ			
	B	Exp(B)	B	Exp(B)		
調査年ダミー	0.315	**	1.371	0.989	**	2.687
結婚ダミー	0.662	**	1.939	0.928	***	2.529
愛情ダミー	1.265	*	3.544	1.508	***	4.517
納得ダミー	0.996	*	2.707	1.15	***	3.159
結婚ダミー×調査年ダミー				-0.981	*	0.375
愛情ダミー×調査年ダミー				-0.778	*	0.459
納得ダミー×調査年ダミー				-0.58		0.560
定数	-1.955	***		-2.152	***	0.116
-2 対数尤度	2965.168		2959.905			
Cox-Snell R2	0.034		0.036			
Nagelkerke R2	0.049		0.051			

注) \*:p<0.05 \*\* :p<0.01 \*\*\* : p < 0.001

まずモデルⅢからみると、調査年ダミー（基準は1987年）はキス経験に有意な正の効果をもっており、男子と同様、1987年に比べ93年においてキス経験者が多いことが再確認された。また性規範については、「どんな場合でもいけない」に比べて「結婚が前提ならかまわない」「愛しあってればかまわない」「お互いに納得していればかまわない」と考えるほど、いずれもキス経験が促進される。このなかでもとくに「愛しあっていればかまわない」と考える者がキスを経験するオッズは、「どんな場合でもいけない」のオッズの3.5倍ともっとも大きな影響力をもっており、ここでも性行動を愛情の証と考える〈純愛志向〉の強さをうかがわせる。

次にモデルⅣで調査年との交互作用をみると、「納得していればかまわない」との交互作用を除き、他の2つの交互作用が5%水準で有意になった。係数の符号は負であるが、これは男子と同様、1987年を基準としたことから、87年に比べ93年のほうが、結婚や愛情の重視がキス経験をより促進していることを意味する。

### 3. 「遊び志向」の登場？：1990年代

NHK放送文化研究所の「日本人の意識」調査によれば、戦後日本人の意識は2段階を経て変容してきたという（荒牧 2015）。荒牧（2015）は、1973年から2013年までの「日本人の意識」調査データを数量化Ⅲ類にかけ、「伝統志向—伝統離脱」「まじめ志向—あそび志向」という2つの軸を抽出した。そして、この軸に沿って、この40年間にわたる日本人の意識の変化を2段階に分けてとらえている。それによると、第一段階は「伝統志向→伝統離脱」の変化であり、第二段階は「まじめ志向→あそび志向」の変化であるという（図6参照）。婚前交渉に対する4つの態度をこの軸上に位置づけると、伝統志向に当たるのが「婚前交渉不可」、伝統離脱に当たるのが「愛情で可」、さらに遊び志向には「無条件で可」が含まれるという。

恋愛における「あそび志向」の登場はまた、ギデンズの議論を踏まえて若者雑誌の分析をした谷本（2008）によっても指摘されている。谷本（2008）は、ロマンティック・ラブが普及した1970年代と、それが展開していった1990年代以降代の若者雑誌—男性誌では『プレイボーイ』など、女性誌では『ノンノ』など—の言説分析をした。

その結果、この30年ほどの間に恋愛の結末を結婚とするロマンティック・ラブの記事が減少する一方で、結果よりもプロセスを重視し、恋愛をシェルターとして享乐的な小宇宙を作り、不確定で曖昧な揺れを楽しむ現代的恋愛、たとえば「友人以上恋人未満」を推奨する記事が増えてきたという。すなわち、「永遠を誓う真面目な」ロマンティック・ラブから、未確定な関係を楽しむ「あそび」の恋愛を扱った記事が増加しているという。こうして、「真面目な」ロマンティック・ラブが減って、「楽しみ」や「あそび」を志向した恋愛が増えている点に注目して、谷本（2008）は、ギデنز（Giddens 1990=1993,1992-1995）のいう「再帰的近代」の議論を踏まえて、現代の恋愛言説の特徴を、①結末（結婚など）の先送り、②人間関係の曖昧さを享受する傾向、③曖昧なアプローチ方法や演出を歓迎する傾向、④対社会性が希薄化し、二人自閉する志向、にあるとしている<sup>8</sup>。

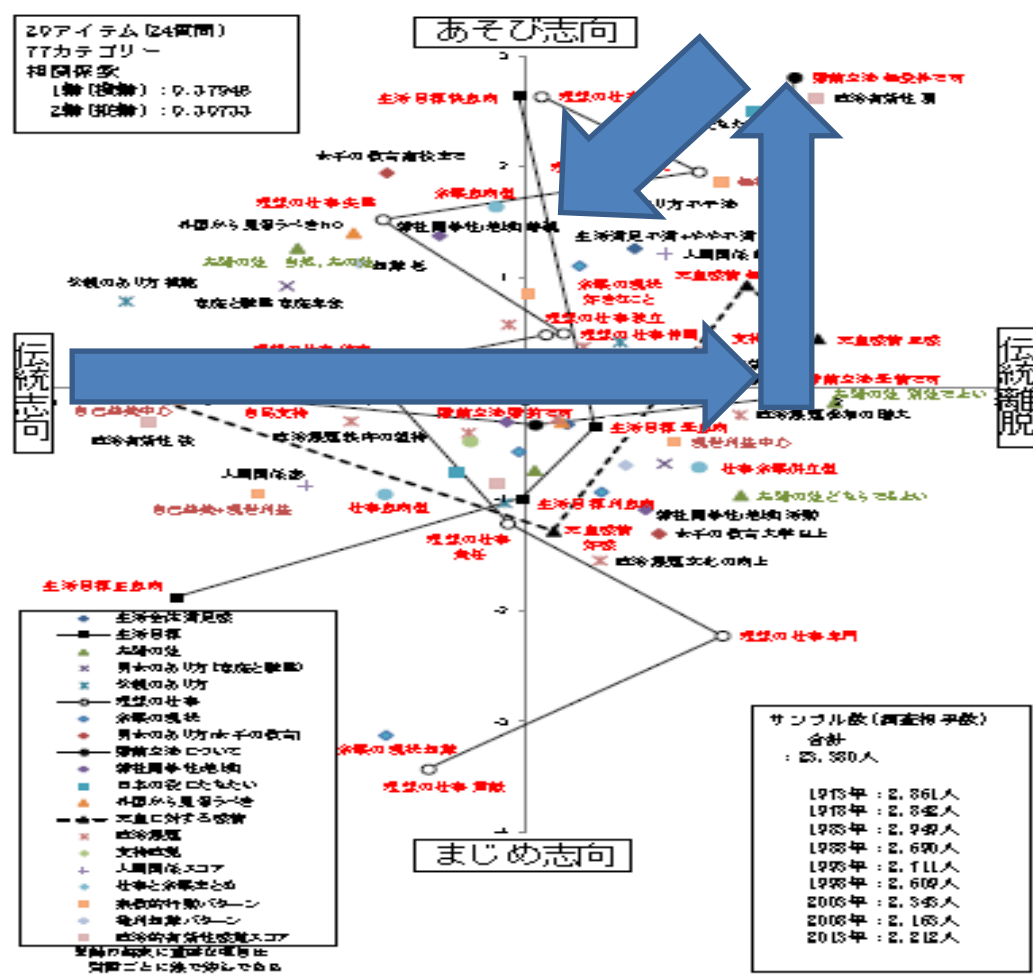


図6 日本人の意識構造 (出典：荒牧(2015)より筆者作成)

同様の指摘は、女子中高生を対象とした『セブンティーン』の性愛表象の変容を1969年の創刊号から1994年まで追跡した桑原（2014）によってもなされている。それ

<sup>8</sup>その一方で、谷本（2008）はまた、ギデنز（Giddens 1990=1993,1992-1995）の「再帰的近代」の議論から「こぼれおちる」ものにも注目している。それは、たとえば「揺れや曖昧さを楽しむこと」という現代的恋愛の特徴である。この特徴について、谷本（2008）は、現代の若者がウィンドウショッピングやネットサーフィンを楽しむ「消費者」になっているという仮説を提示する。つまり、実際に買う＝結婚するよりも、買うかどうか迷いながら商店街やネット世界をさまよう＝恋愛・恋愛未満に楽しみを見出す「非生産的消費者」になっているという。したがって、再帰的近代の議論から「こぼれおちた恋愛物語の特徴」は、子ども時代から消費社会に慣れ親しんだ若者が徹底的な消費者として振る舞うことから、買うかどうか迷っている恋愛未満という曖昧さを楽しむ現代的恋愛の姿だという。

によると、当初は性愛体験談のドラマ化から始まった性愛描写では、「セックス、特に初体験に「愛」の象徴というポジティブな意味づけ」がなされ、結婚までの性交渉を禁止する純潔規範に代わって、愛と性を結びつける処女性規範が強化された<sup>9</sup>。これに対して、80年代になると、女子の直接的な性体験談よりも男子の視線をフィルターとして性経験が「コメディ化」されて語られることで性の<重さ>が払拭されていったものの、その一方で少女の妊娠リスクというネガティブさが表象されることで、少年少女における性の二重規範が提示されることになった、という。

さらに、桑原（2014）によると、女子中高校生の性交経験率が上がった1990年代になると、彼女らの性行動は調査結果を通じて普遍的なものとして、また「体験談」を交えて具体的なものとして『セブンティーン』誌上に掲載される。こうしたから読者の「性愛報告」のドキュメント化においては、性体験は「普遍性」を帯びたものへと書き換えられた（ただし、そこには性交が「愛の象徴」であると同時に妊娠のリスクを伴うという70年代からの両義性は保持されていた）。それと並行して「性行動が冗談を交えて<軽く>て自由に語られるように」ようになった。ここには少女における性規範の変容、いわば結婚まで性交渉を禁止する純潔規範が解体し、相手への愛情のあかしとして処女性を「ささげる」という処女性規範が構築されることになった。したがって、『セブンティーン』が構築したセクシュアリティとは、「愛による処女性重視と物象化、性が解放された少年と、それゆえに妊娠リスクが高まるほう助の性の二重規範、少女の身体的苦痛、少女の身体的苦痛の受け入れと、それと引き替えの相互の情緒的絆の規範化」（桑原 2014:264-265）であったとされる。

#### 4. むすび

先に紹介したNHK放送文化研究所の「日本人の意識」調査では、最新の2013年調査も含めて数量化Ⅲ類による回答パターンの分析を行い、戦後日本人の意識に「伝統志向→伝統離脱」「まじめ志向→あそび志向」という2段階の変容をみいだしたが、その一方で1998年をターニングポイントとして、どのコーホートでも「伝統回帰」とも呼ぶべき動きがみられることにも注意を促している（荒牧 2014）。図7はこの2の軸からなる空間上に、各コーホートの回答のパターンの変化をプロットしたものである。

1973年から2013年までの日本人の意識の変化が伝統志向→伝統離脱→あそび志向→伝統回帰として描かれている（荒牧 2014）。

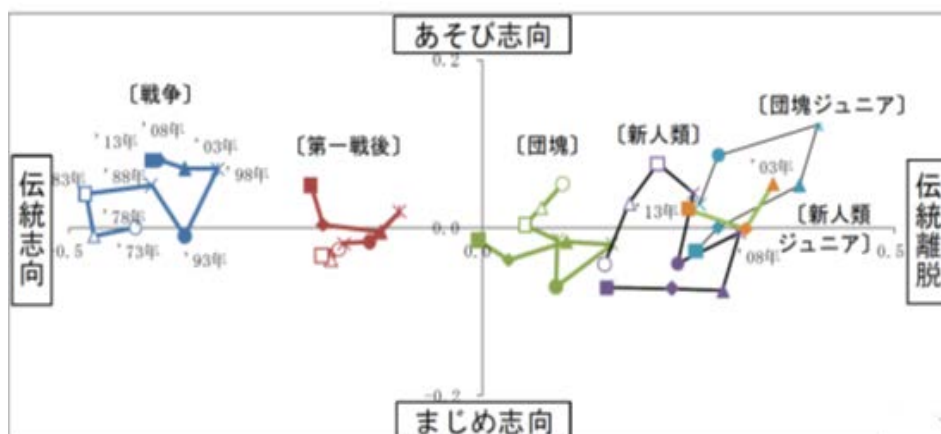


図7 世代（コーホート別）にみた意識変化（出典：荒牧（2014））

<sup>9</sup>ただし、桑原（2014）によれば、70年代から80年代にかけて、性交が愛の証であると同時に妊娠のリスクを招くものという両義性においてとらえられていたという。やがて90年代に若い世代にも避妊技術（具体的にはコンドームの使用）が普及すると、性交のネガティブな側面は性交時の挿入に伴う「痛み」に代わっていった、という。

この図式に従えば、今回扱った1980年代末から90年代初めの高校生の性規範は、伝統志向（純潔規範）から伝統離脱（純愛志向）の途上にあり、やがて来る情報化の流れによるあそび志向（恋愛バブル）への地ならしをした時期に当たる。しかし、ミレニウムを経て、青少年の性行動も伝統回帰の時期を迎える。

これによると、若いコーホートほど伝統を離脱しているが、もっとも若い「新人類ジュニア」（出生年1984年～1997年）においても、1998年を境に「伝統志向」「まじめ志向」への動きを見せている。先に示した婚前交渉への態度についてみても（図2-1・2-2）、男女とも2003年から2008年にかけて、純愛規範をもつ者、すなわち「結婚式がすむまでは、性的的交わりをすべきではない」「結婚を約束した間柄なら、性的交わりがあってもよい」と考える者が増え、2008年の時点で男子では3割弱、女子では4割弱に上っている。

またJASE調査でも、冒頭の図1でみたように、青少年の性行動率は低下傾向にある。加えて、意識の面でも伝統回帰・まじめ志向とも呼ぶべき動きがみられる。図8では、今回分析した性規範に代えて採用された性規範に関する設問の1つ、すなわち「恋人以外との性交」に関する設問への回答の分布に、その後どのような変化があったのかについて、高校生の男女別に示したものである。「恋人以外との性交」は、モノガミー規範を逸脱する＜あそび志向＞の性愛規範であり、＜純愛志向＞と対立するものである。この性行動を「かまわない」「どちらかといえばかまわない」「どちらかといえばよくない」「よくない」と肯定する者は、男子では微増傾向を示すが、女子ではむしろ増える傾向がある。また男女とも「よくない」という回答がどの時点でも8割程度を占め、大半の高校生がモノガミー規範を基礎とする＜純愛志向＞にあると思われる。

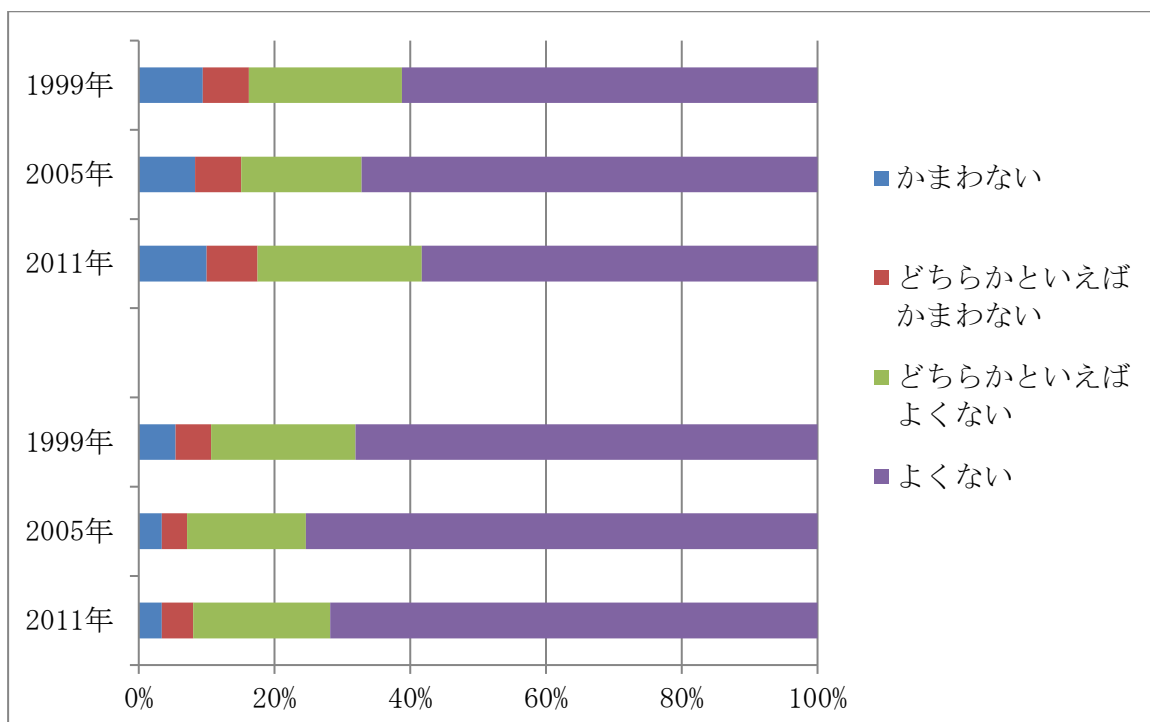


図8 「恋人以外との性交」への態度の変容（上段：男子、下段：女子）

冒頭にも述べたように、本稿で検討した1980年代後半から90年前半にかけての純潔規範の解体は、1990年代の情報機器（携帯電話等）の普及によって、90年代の高校生の性行動の活発化、いわば「性愛バブル」とも呼ぶべき時代をもたらした。しかし、冒頭の図1にもあるように、それもミレニウムをまたいで頭打ちとなり、2000年代に至って伝統回帰、さらには「草食化」（深沢 2007；森岡 2008）とまで言われるように

なった。今後この傾向が続くのか、それとも伝統回帰または草食化に歯止めがかかるのか見極めるには、今後の調査研究を待つほかはない。こうした中で、今回論及した時代に歴史的な意味づけをするなら、伝統離脱＝純潔規範を解体することで、性の二重規準を溶解させ、避妊技術の普及と相まって男女の性愛の選択性を高めたことであろうか。その帰結が、90年代の性愛バブルであり、2010年代の草食化であったといえるのではないだろうか。

#### 【謝辞】

〔二次分析〕に当たり、東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センターSSJ データアーカイブから〔「第4～7回青少年の性行動全国調査（JASE SSJDA版）, 1987, 1993, 1999, 2005, 2011」（青少年の性行動全国調査研究会）〕ならびに〔「日本人の意識調査, 1973～2008」（NHK放送文化研究所世論調査部）〕の個票データの提供を受けました。記して感謝いたします。

#### 【参考文献】

- 赤松啓介,1981,『非常民の性民俗』明石書店。  
———,1994,『夜這いの民俗学』明石書店。  
荒牧央,2015,「人びとの意識はどう変わったか：40年の動きをたどる」統計数理研究所公開講演会（2015/11/5）報告スライド。  
深澤真紀,2007,『平成男子図鑑』日経BP社、  
Giddens,Anthony,1992,*The Transformation of Intimacy : Sexuality, Love and Eroticism in Modern Societies*. Polity Press(=1995, 松尾精文, 松川昭子訳『親密性の変容：近代社会におけるセクシュアリティ、愛情、エロティシズム』而立書房)。  
原純輔,2007,「「青少年の性行動全国調査」とその30年」日本性教育協会編『「若者の性」白書：第6回青少年の性行動全国調査報告書』小学館：6-23。  
池谷壽夫,2001,「純潔教育に見る家族のセクシュアリティとジェンダー：純潔教育家族像から60年代家族へ」『教育學研究』68(3), 274-285。  
井上章一,1999,『愛の空間』角川書店。  
石川由香里, 2007,「情報源の違いがもたらす性意識のジェンダー差：＜純粋な恋愛志向＞をめぐって」日本性教育協会編『「若者の性」」白書：第6回青少年の性行動全国調査報告書』小学館.81-100。  
香川めい・児玉英靖・相澤真一.2014,『〈高卒当然社会〉の戦後史』新曜社。  
片瀬一男,1997,「SASによるカテゴリーカル・データの分析(2)：分散分析とログリニア分析」『東北学院大学論集（人間・言語・情報）』118：223-276。  
———,2007,「青少年の生活環境と性行動の変容—生活構造の「多チャンネル化」のなかで」日本性教育協会編『「若者の性」」白書：第6回青少年の性行動全国調査報告書』小学館,23-48。  
———,2017,「『リスク』としての性行動、『危険』としての性行動：避妊をめぐる男女の非対称性」『東北学院大学論集』  
草柳千早,1999,「関係の変容と個人：分化と恋愛をめぐって」『三田社会学』(4), 17-32  
桑原桃音,2014,「1970～1990年代の「セブンティーン」にみる女子中高生の性愛表象の変容」小山静子・赤坂香奈子・今田絵梨香編『セクシュアリティの戦後史』京都大学出版会：245-266。  
国立社会保障・人口問題研究所,2016,『第15回出生動向基本調査（結婚と出生に関する全国調査）』  
[http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou15/NFS15\\_gaiyou3.pdf](http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou15/NFS15_gaiyou3.pdf)  
小山静子, 2014,「純潔教育の登場：男女共学と男女交際」・赤坂香奈子・今田絵梨香編、『セクシュアリティの戦後史』京都大学学術出版会：15-34。  
小谷野敦,1997,『男であることの困難：恋愛・日本・ジェンダー』新曜社。

- Luhmann, Niklas.,1991,*Soziologie des Risikos*,Walter de Gruyter.(2014、小松丈晃『リスク社会学』新泉社)
- 森岡正博,2008、『草食系男子の恋愛学』メディアファクトリー
- Notte, David,2017.『純潔の近代：近代家族と親密性比較社会学』慶應義塾大学出版会
- 佐伯順子,1997.『「色」と「愛」の比較文化史』岩波書店.
- 佐藤龍三郎,1997.「近年の日本の人工妊娠中絶の動向」マクロ統計資料の分析『厚生  
の指標』44(5)：12-17.
- 高橋一郎,1993,「青少年のセクシュアリティと教育」『教育社会学研究』53：31-46.
- 高橋幸市・荒牧央,2014,「日人の意識・40年の軌跡(1)：第9回「日本人の意識」調査か  
ら」『放送研究と調査』64(8):2-23.
- 高橋征仁,2010,「社会統計でみる<草食系男子>の虚実：欲望の時代からリスクの時代  
へ」『現代性教育月報』、28(1)：1-7.
- .2013,「欲望の時代からリスクの時代へ」日本性教育協会編『「若者の性」白  
書：第7回青少年の性行動全国調査報告』小学館：43-61.
- 谷本奈穂,2008,『恋愛の社会学：「遊び」とロマンティック・ラブの変容』青弓社.
- 太郎丸博,2005,『人文・社会科学のためのカテゴリカル・データ解析入門』ナカニシヤ  
出版.
- 轟亮,2001「職業観と学校生活感」尾嶋史章編『現代高校生の計量社会学』ミネルヴァ  
書房,129-151.
- トジラカーン・マシマ,2014,「楽しむものとしての”性“はいかにしてもたらされたか：  
1970~80年代の『少女コミック』の場合」小山静子・赤坂香奈子・今田絵梨香編  
『セクシュアリティの戦後史』京都大学出版会：267-286.
- 見田宗介,1978,「世代形成の二重構造」日本放送協会放送世論調査所編『日本人の意  
識：NHK世論調査』至誠堂：145-163.
- .1980,「70年代における青年像の変貌」日本放送協会放送世論調査所編『第2日  
本人の意識：NHK世論調査』至誠堂：73-93.



# 青少年と性被害、その趨勢分析

石川由香里（活水女子大学）

## 1. 課題設定

青少年の性被害については第4回から第7回まで継続して調査票に盛り込まれ、そのたびごとに分析されてきたものの、その経年変化については部分的に扱われていたにすぎない（石川2001；土田2007；羽渕2011）。そこで本報告では、青少年の性被害の趨勢について検討を行う。

過去の青少年の性行動調査の傾向は第7回での経験率低下を例外として、おおむね低年齢化し活発化する方向に進んできたと分析されている（原2007）。その背景には社会全体で性の開放化が進んだこと、またメディアの発達により日常的に性情報に接する機会が増えたことの影響が指摘される。しかし青少年の性行動の活発化にはリスクも危惧されている。その1つが性犯罪に巻き込まれることであり、とくに近年ではSNSの利用を通じた青少年の性被害についての報道がメディアでよく取り上げられている。しかし、はたして青少年の性被害は実際に増加傾向にあるといえるのだろうか。

性被害に対する社会的関心の高まりは、性被害の防止に向けた法律が相次いで制定されたことに現れている。まず1999年改正（2000年施行）の男女雇用機会均等法にセクシュアル・ハラスメント（以下、セクハラと略記）が禁止事項として盛り込まれた。これを皮切りに、同年に児童買春・ポルノ防止法が制定、また2000年に成立した児童虐待防止法には性的虐待が位置づけられ、さらに同じ年にストーカー防止法が、2001年には配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護等に関する法律（DV防止法）が出された。ただし法制後の効力についての見方は様々である。たとえば児童虐待についての相談件数は年々上昇し、セクハラ相談件数については横ばいが続いているわけだが、こうした被害が実態として増えているのか、それとも社会的関心が高まったために相談されやすくなったのかについては、議論の分かれるところである。

この調査における数値も、青少年がいわば自己申告した数であり、とくに「身体をじろじろ見られる（以下、視線被害と略記。以下同じ）」という被害においては、本人の意識に左右される面があることは否定できない。一方、「性的な言葉をかけられる（言葉被害）」「身体を見せられる（露出被害）」「体を触られる（接触被害）」「性的誘いかけを受ける（誘惑被害）」「無理やり性的行為をされる（性的強要被害）」については実数を示すものとみてよいだろう。そこで、2000年を境とする1997年の第5回以前と2003年の第6回以降との間に視線被害経験について違いがあるのかを調べることにより、社会的関心の高まりによる被害の意識化への影響が存在するのか、確認したい。もし第6回以降に増加が見られれば、意識化の影響があるといえるだろう。

次にその他の被害についても変化を調べ、青少年が性被害に巻き込まれやすくなっているといえるのか、確認する。また、性被害の影響はどのような面に現れるのか、それについても可能な範囲で分析していきたい。

## 2. 社会的関心は被害者意識を高めたか

ここで明らかにしたい論点は、社会的関心の高まりによる被害意識への影響である。したがって加害者についての選択肢のうち「家族」「友人」ではなく「見知らぬ人」を取り上げることにする。次の図1は、第4回から第7回までの視線被害のうち、「見知らぬ人から」の被害についての結果をまとめたものである。

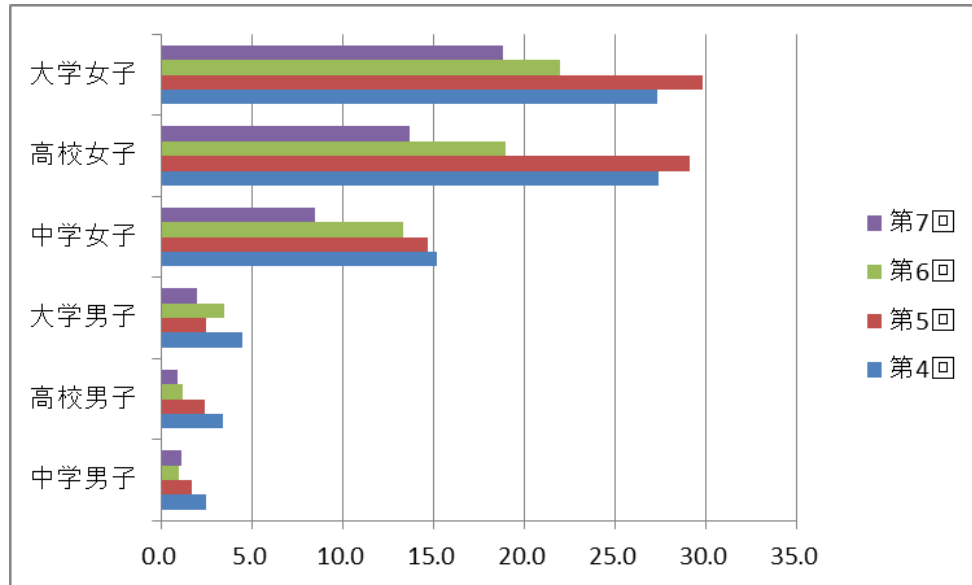


図1 見知らぬ人からの視線被害推移 (学校段階別・男女別)

この図からは、第5回までよりも第6回目以降に被害経験率はむしろ減少していることがわかる。この間に性被害に関わる法律が矢継ぎ早に制定されるなど社会的関心の高まりがあったわけだが、そのことが被害意識を高めることにはつながっていない。これについて青少年の申告している被害は、実際に生じている数であると判断できる。

そのほかの被害経験についてはどうだろうか。それぞれ第4回から第7回までの結果を男女別、学校段階別に比較したところ、やはりほとんどの被害項目において減少がみられた。例として図2には「見知らぬ人から」の痴漢被害についての結果を示した。痴漢被害については、女性専用車両の導入や駅構内の呼びかけポスターなど、防止策が講じられるようになったことが、その減少となって功を奏しているのかもしれない。

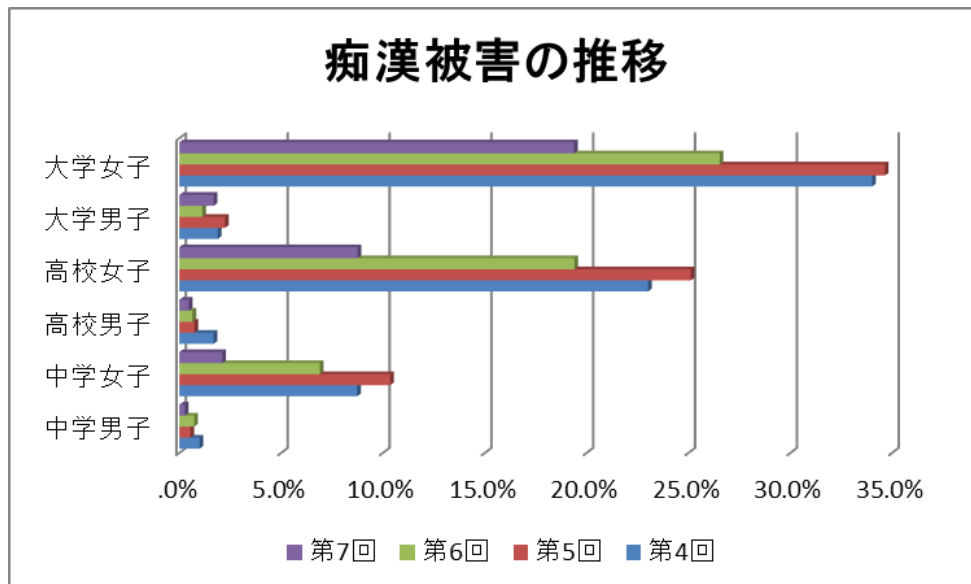


図2 痴漢被害の推移 (学校段階別・男女別)

ただし被害を被害として認識するためには、自らが性的まなざしを注がれる存在であるという自己意識もまた必要だと考えられる。下の図3は4回から7回のデータの合併データについて、デート経験と被害経験の関わりを、学校段階別にみたものである。

## デート経験と被害意識

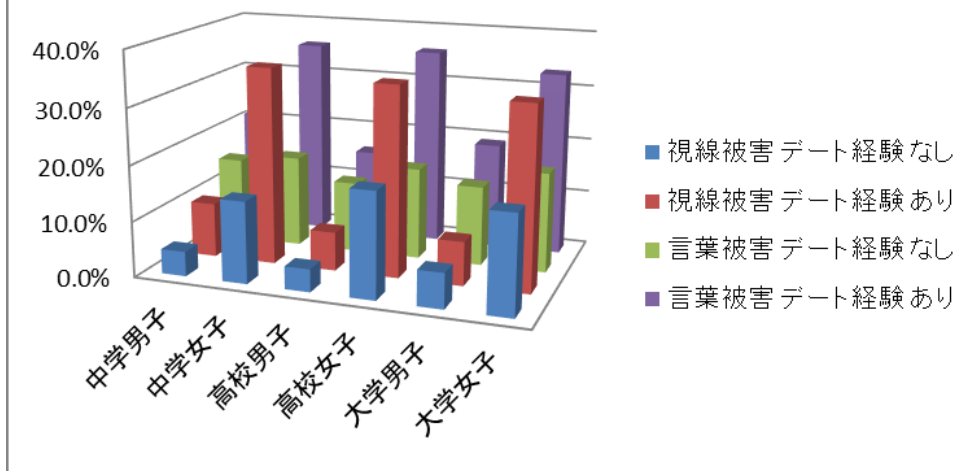


図3 デート経験と被害経験（学校段階別・男女別）

いずれの学校段階においてもデート経験者のほうに被害経験が多くみられる。もちろん、性被害が自らを性的存在として意識化させる経験となる場合もあるだろうが、多くは本人のデート経験が先行するか、デート経験によって過去の出来事が被害として意味付けされていると考えるのが自然であろう。つまり被害として意識するか否かには、本人の性的経験の有無が関連する。またこの図から気づかされるもう1つの点は、自らの性的対象としての意識化が男子よりも女子に強くなされている点である。調査回数別に見ても、男女間の有意差はいずれの学校段階でも大きいままである。欲望される対象としての身体であることのジェンダー・ギャップは、まだかなり強いといえる。

### 3. 減少しない2つの被害形態

性的被害経験の多くが減少する中であって、数値の下がっていない被害経験が2つ存在する。その1つが友人からの言葉被害である。図4からは被害割合の減少はうかがえない。またいずれの年度においても男女差が見られず、むしろカテゴリーによっては男子において女子より数値が高い箇所も存在することは、この被害の特異な点である。

## 友人からの言葉被害

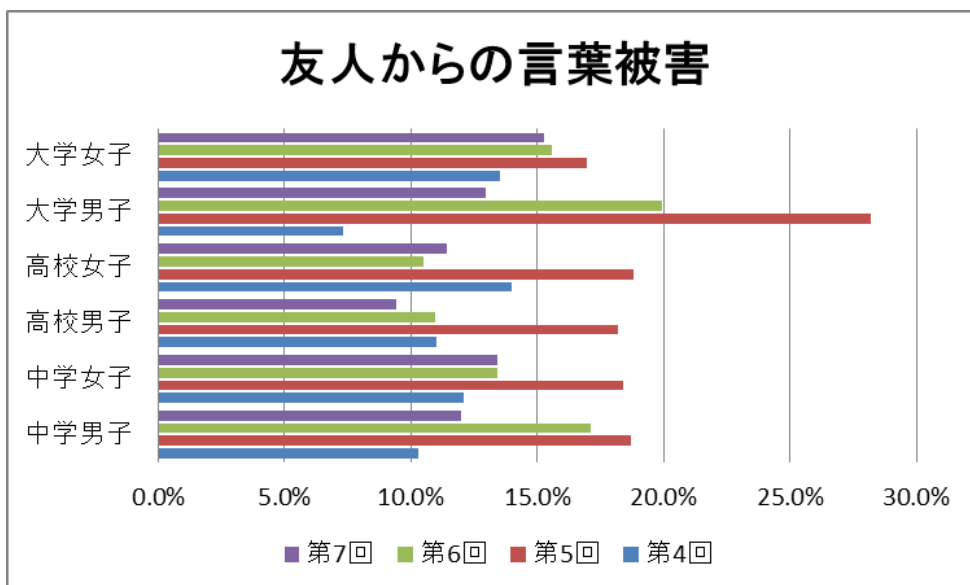


図4 友人からの言葉被害経験（学校段階別・男女別）

羽瀨はこうした友達からの言葉被害が、いじめによるものである可能性を示唆している（羽瀨 2011）。男子間のいじめに性的要素がしばしば含まれることは、先行研究の指摘するところであり、特にホモフォビアによる影響は大きい（Collier et. al. 2013）。したがって友人による言葉被害を防ぐためには、いじめ対策に加え、性の多様性を認める教育が欠かせない。しかし性教育で習った内容として性的マイノリティを選択肢の1つにおいた第7回の結果を見ると、履修状況は中学男子7.1%、中学女子5.3%、高校男子19.2%、高校女子15.1%と、他の項目に比べ格段に低い数値にとどまっている。文部科学省も性同一性障害への配慮を学校に求めるように通知しており、性的マイノリティについてのさらなる教育は大いに期待される場所である。

友人からの言葉被害に加えてもう1つ、減少していないのが性的強要被害である。性的強要は密室の中で生じる出来事であるために、社会的意識が高まってもその防止には困難が伴うと考えられる。

最も深刻な性的暴力と考えられるこの性的強要被害については、被害者への影響が心配されながら全体数が少ないために、これまで分析の俎上に載せることがなかなかできなかった。そこで今回の分析で、第4回から第7回のデータを合併することで一定数を確保し、その影響についてみていくことにする。

表1に示すように性的強要被害を受けているケースはそうでないケースに比べ、性的経験の平均年齢が低い。とりわけ「家族から」の性交被害を受けている場合に顕著である。子どもに対する家族からの性的虐待の直接の結果と考えられる。

**表1 性的強要被害経験の有無による性的経験年齢平均の比較**

		度数	平均値	F 値	有意確率 (両側)
家族から	デート年齢 経験あり	75	13.8800	2.465	0.005
	経験なし	10491	14.6070		
	キス年齢 経験あり	68	13.5147	15.137	0.000
	経験なし	7964	15.1207		
	性交年齢 経験あり	55	14.8182	19.939	0.000
経験なし	5012	16.7512			
全体	デート年齢 経験あり	607	14.2224	1.526	0.000
	経験なし	9961	14.6257		
	キス年齢 経験あり	574	14.3955	0.970	0.000
	経験なし	7459	15.1620		
	性交年齢 経験あり	459	15.6580	11.394	0.000
経験なし	4609	16.8373			

したがって性的強要被害にあった青少年の傾向の1つとして家庭のイメージが悪いことが予測される。図5は、女子について家庭のイメージについての選択肢「楽しい」「どちらとも言えない」「楽しくない」の中から「楽しい」を選択した割合を、性的強要被害の有無別に示したものである。

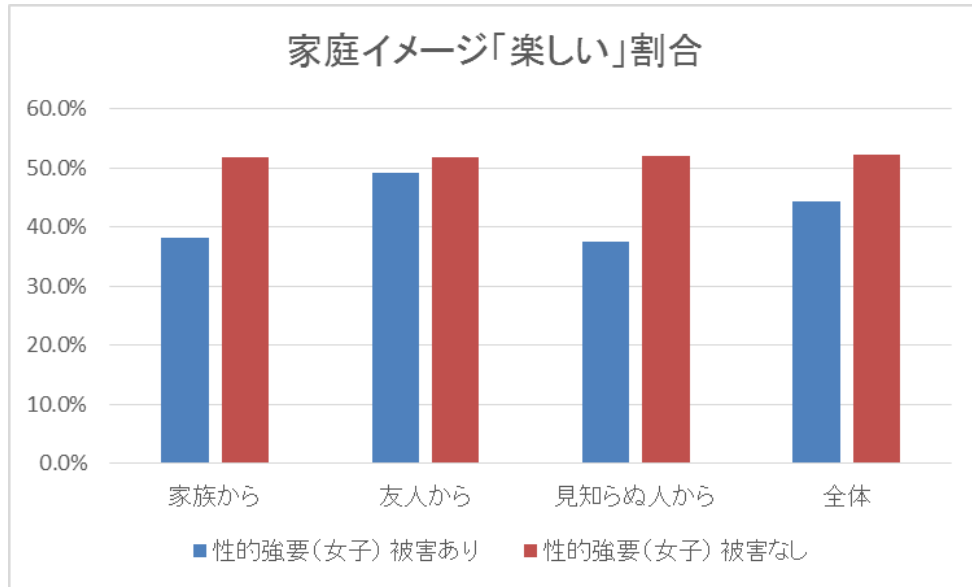


図5 性的強要被害と家庭イメージの関係（女子）

加害者が「家族」であっても「見知らぬ人」であっても被害者の抱く家庭イメージは悪い。家族内で性的虐待が行われれば家庭のイメージが悪くなるのは当然といえるが、ここからは家庭内が楽しくないために外に出かけ、結果として「見知らぬ人」から性暴力を受けることにつながっている可能性も垣間見える。

さらなる関連性として、表2に示すように性的強要被害者の性交相手の数の平均値が高いことがわかる。性行動の活発さが被害を招くのか、被害にあったことがさらなる性行動を誘発するのかは定かではない。「友人から」の被害で顕著な違いがみられることは、前者の可能性を示唆する。しかし一方で「家族から」の場合にも平均値に違いがみられることから、後者の可能性についても無視するわけにはいかないだろう。

表2 性的強要被害の有無による性交相手数の平均値の比較

		度数	平均値	F 値	有意確率 (両側)
家族から	被害あり	47	3.0213	6.036	0.003
	被害なし	4761	2.3109		
友人から	被害あり	210	3.6952	48.131	0.000
	被害なし	4598	2.2549		
全体	被害あり	412	3.4782	91.772	0.000
	被害なし	4397	2.2095		

#### 4. どのような青少年が被害にあいやすいのか

以上のまとめとして、性被害経験の要因としていかなる要素が考えられるか、検討を行う。まず、成長につれ外部社会との接触機会が増えることから、年齢は当然影響するだろう。また、被害者は女性が多いことから性別が関わることも明らかだ。性的強要被害についての分析に示したように、家庭イメージも性行動の活発化を促す要因として指摘することができる。そして調査回数が進むほど被害が減少していること、ならびに性経験が進むことで被害意識が高まるとの仮説は正しかったのか、誘惑被害についてそれらの変数を投入した二項ロジスティック分析を行い、検証した。その結果が表3である。モデル1にはデート経験を、モデル2にはキス経験、モデル3には性交経験を加えてい

る。

モデル1では年齢が高いほど、また女性のほうが被害にあいやすいことがわかる。また家庭のイメージが楽しいほど、調査回数が第5回以外であると被害にあいにくい。そしてデート経験があると被害を受けやすい。モデル2のキス経験、モデル3の性交経験についても経験者のほうが被害に遭遇しやすい。つまりここまで検討してきたことが、すべてにわたり確認できた結果となった。

表3 誘惑被害についての二項ロジスティック分析

	モデル1			モデル2			モデル3		
	B	S.E.	Exp(B)	B	S.E.	Exp(B)	B	S.E.	Exp(B)
年齢	0.105***	0.009	1.111	0.072***	0.009	1.075	0.041***	0.010	1.042
女性ダミー	0.805***	0.045	2.236	0.827***	0.046	2.286	0.832***	0.047	2.298
家庭イメージダミー	-0.283***	0.045	0.754	-0.281***	0.046	0.755	-0.270***	0.046	0.764
第4回ダミー	-0.379***	0.064	0.684	-0.514***	0.066	0.598	-0.453***	0.068	0.635
第5回(reference)									
第6回ダミー	-0.297***	0.060	0.743	-0.349***	0.062	0.706	-0.355***	0.062	0.701
第7回ダミー	-0.512***	0.058	0.599	-0.518***	0.059	0.596	-0.508***	0.059	0.602
デート経験ダミー	1.530***	0.056	4.617	0.990***	0.067	2.692	0.903***	0.070	2.466
キス経験ダミー				0.989***	0.060	2.687	0.743***	0.068	2.102
性交経験ダミー							0.606***	0.059	1.832
定数	-4.789***	0.147	0.008	-4.418***	0.151	0.012	-3.927***	0.160	0.020
Nagelkerke R2 乗	.160			.183			.194		
-2 対数尤度	14638.864a			14085.000a			13656.784a		
N	23555			23555			23555		

## 5. 結論

青少年の性被害は全体として減少している。その背景にあるのは、性被害を防止しようとする社会全体の動きであり、それに伴う法制化は一定の効力を発揮している。しかしその中であって、友人からの言葉被害と性的強要被害は減少していなかった。友人からの言葉被害の背景には性的いじめの存在があると考えられることから、その防止のために人権教育が必要であり、とくにセクシュアル・マイノリティに関して取り上げることは、もっと積極的に取り組まれるべき教育内容である（生島 2011）。

一方の性的強要被害については、それが密室で行われ、とくに家庭内で生じているケースにあってはその防止にはかなりの困難が伴うだろう。しかしその後の二次被害を拡大させないためにできることはある。例えばワン・ストップセンターを増設するとともに、その周知を徹底することは重要であり、被害者へのケアの充実は必要不可欠な措置と言えよう。二次被害の防止についての情報提供も、学校性教育の中でも取り組むべき事柄であるし、また生徒の異変に対しては、教員など周囲の大人によるこれまで以上に細やかな目配りが望まれる。

### 【謝辞】

二次分析にあたり、東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センターSSJデータアーカイブから〔「第4～7回青少年の性行動全国調査（JASS SSJDA版）、1993、1999、2005、2011」（青少年の性行動全国調査研究会）〕の個票データの提供を受けました。記して感謝いたします。

【参考文献】

- Collier, K. L., Beusekom, G., Bos, H. M. W., Sandfort, T. G. M., 2013, 'Sexual Orientation and Gender Identity/Expression Related Peer Victimization in Adolescence: A Systematic Review of Associated Psychosocial and Health Outcomes', *The Journal of Sex Research*50(3-4):299-317.
- 原純輔「『青少年の性行動全国調査』とその30年」日本性教育協会編『「若者の性」白書 第6回 青少年の性行動全国調査方向書』:8-21 小学館.
- 生島博之, 2011, 「性教育に関する教育臨床学的研究(1)」『愛知教育大学教育臨床総合センター紀要』(〔1〕):9-16.
- 石川由香里, 2001, 「性被害とセクシュアリティの形成」日本性教育協会編『「若者の性」白書 第5回 青少年の性行動全国調査報告』:131-156,小学館.
- 土田陽子, 2007, 「青少年の性被害と恋人からのDV被害の現状と特徴」日本性教育協会編『「若者の性」白書 第6回 青少年の性行動全国調査方向書』:121-144,小学館.
- 羽瀨一代, 2013, 「現代日本の若者の性的被害と恋人からの暴力」日本性教育協会編『「若者の性」白書 第7回 青少年の性行動全国調査方向書』:141-160,小学館.